

初年次教育学会

ニュースレター 第17号

Japanese Association of First Year Experience
at Universities and Colleges

初年次教育学会 事務局分室

〒162-0801

東京都新宿区山吹町 358-5 アカデミーセンター

TEL: 03(6824)9372 FAX: 03(5227)8631

E-mail: jafye-office@bunken.co.jp

事務局

関西大学 山田 剛史研究室内

今号の内容

1. ご挨拶
2. 事務局からのお知らせ
3. 学会誌編集委員会からのお知らせ
4. 大会運営委員会からのお知らせ
5. 第18回大会課題研究の登壇者募集
6. 初年次教育実践交流会の報告
7. 「2024年度教育実践賞」審査結果報告
8. 機関会員アンケート結果の報告
9. 編集担当より

1. ご挨拶

会長 藤田 哲也 (法政大学)

2024年度末で、2期4年の会長の任期が満了となります。この原稿を書いている時点では、大きなトラブル等もなく、無事に任期を終えられそうでホッとしているところです。これも会員の皆様からの学会活動・学会運営に対する積極的な参加、ご支援の賜物だと考えております。この4年間（もちろんそれ以前からの期間も含め）誠にありがとうございました。

先ほど「大きなトラブル等もなく」と書きましたが、4年間を振り返りますと2021年度から2024年度にかけて、大きな変化や切実な対応を迫られたことも併せて思い出されます。もう何度も言及していることですが、会長の任に就いた1年目は、まだ新型コロナが猛威を振るっているなかでした。そのため、2021年度の第14回大会は完全にオンラインのみでの開催となりました。その前年度の大会は大会要旨集発行のみでの大会実施であったことに比べれば、オンラインでも会員の皆様の研究発表の機会を持てたことは大きな改善と感じつつも、一方ではやはり対面での交流ができないことに物足りなさを感じたのも事実でした。

2023年5月から新型コロナウイルス感染症（COVID-19）が感染症法上の「新型インフルエンザ等感染症」に該当しない、「5類感染症」に位置づけられるという動向に合わせて、2022年度の第15回大会（於：多摩大学）、続いて第16回大会（於：山梨学院大学）は対面中心で開催することができました。情報交換会も含めて、ほぼコロナ以前と

同様のプログラムを実施することができ、学会のコミュニティとしての機能を再認識する好機となりました。発表された研究内容を見ると、「以前と同様」というよりむしろ、コロナ禍という逆境に立ち向かう実践が多く、皆様の不断の努力を実感することを通じて頼もしく感じたことを思い出します。

2024年度の第17回大会（於：東京家政大学）では対面のみでプログラムを実施する予定にしておりましたが、完全に以前の状態を取り戻せると思っていたのですが、折悪しく台風の影響を受けまして、一部の方にはご参加いただけない、あるいは予定を変更して限定的な参加にとどまらざるを得ない状況が発生いたしました。学会としても、そうした方への情報提供として、少なくともシンポジウム関係についてはオンラインでの動画配信を追加し、できるだけ多くの方に大会コンテンツに触れてもらえるよう、急きょ対応したことが思い出されます。

このように、大会関係だけでもこの4年間に様々な変化があったのですが、それでも「大きなトラブルがない」という形で思い出されるのは、繰り返しになりますが、会員の皆様、役員（理事）の皆様、事務局の皆様のサポートがあってこそだと思っています。改めてこの場でお礼申し上げます。

会長任期中の2022年度には、本学会が2008年に設立してから15年目の節目を迎えました。来たる2025年度は18年目ということになります。昨年のニュースレターにも同じことを書きましたが、学会設立の年に誕生した子が、もう高校生3年生になり、大学に進学してくるのと同じだ

けの年月が流れていることとなります。この間本学会は、社会情勢のみならず教育環境における大きな変化に合わせて、成長・進化してきたといえるでしょう。そしてその成長・進化はこれからも続くものと確信しております。私事になりますが、会長の任期が終わった後も、引き続き学会の「現在」そして「未来」に貢献できるよう微力を尽くそうと考えております。会員の皆様におかれましても、これまで同様に、いやむしろ、これまで以上に積極的かつ主体的に学会運営に関わってくださることに期待を込めて、ご挨拶の筆を置きたいと思っております。

今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

2. 事務局からのお知らせ

事務局長 山田 剛史（関西大学）

いつもお世話になっております。事務局長の山田剛史（関西大学）です。

(1) 2025 年度年会費納入のお願い

お手元に 2025 年度年会費納入のための振替用紙が届いているかと思っております。5 月 31 日までに納めていただければ幸いです。

(2) マイページ活用のお願い

マイページには学会ホームページよりお入りいただけます。マイページからは、会員情報（所属等）の変更が行えます。4 月以降、異動される方、メールアドレスを変更される方などは、ご自身で登録情報を変更することができます。年会費の納入状況もご確認いただけますので、ぜひご利用ください。

ログインに必要な「会員番号」と「パスワード」は、2015 年度に会員だった方には 2016 年 3 月 16 日頃に、2016 年度以降に入会された方には入会時にお送りしたメールに記載されています。今後とも必要となりますので、お手元にお控えください。

(3) 学会誌バックナンバーの PDF 公開について

2022 年より、学会誌バックナンバーを PDF 化して学会ホームページにて広く公開しております。PDF 化につきましては、総会にて承認・周知されておりますが、何らかの事情で、ご自分の論文等を Web で公開できない場合は、事務局までご一報ください。

(4) 名誉会員の推薦・承認について

2025 年 3 月 9 日に開催されました 2024 年度第 4 回理事会において、本学会細則第 3 条 3 に基づき、川島啓二先生（京都産業大学・教授）を名誉会員としたい旨、会長より推薦があり、理事会メンバーの承認を得ました。

川島先生は、本学会設立の発起人、会則等の起草、初代の事務局長として、草創期から長年にわたり本学会の発展に多大な貢献をされ、初年次教育の研究・実践・普及などにおいて顕著な功績を残されております。このたび、そのご功績を称え、名誉会員としてご推薦し、理事会にて正式に承認されましたことをお知らせいたします。

(5) 役員（理事）選挙のお知らせ

2025 年度早々に実施する役員選挙の投票は、前回と同じく Web にて行います。Web による投票期間は、2025 年 4 月 15 日（火）10:00～5 月 15 日（木）17:00 を予定しております。投票ページの URL は学会メーリングリストにてお知らせいたします。ログインの際に必要な「会員番号」と「パスワード」はマイページと同様です。役員被選挙権および選挙権を有するのは、2024 年度に個人会員であり、当該役員選挙投票締切日（5 月 15 日）において引き続き個人会員であり、2024 年度までの学会費を納入している方になります。

3. 学会誌編集委員会からのお知らせ

編集委員長 宮浦 崇（九州工業大学）

まもなく初年次教育学会誌第 17 巻第 1 号がお手元に届くかと存じます。論文 4 件のほか、東京家政大学で開催された第 17 回大会の記録等を掲載しています。

2026 年 3 月発行予定の第 18 巻第 1 号原稿募集についてのご案内です。多くの皆様からの投稿をお待ちしております。

(1) 第 18 巻第 1 号の発行時期

2026 年 3 月

(2) 原稿投稿の期限

2025 年 5 月 31 日

(3) 原稿の執筆、投稿、その他

研究論文、事例研究論文、自著紹介を募集します。

初年次教育学会のウェブサイトに掲載している「初年次教育学会誌執筆要領」「論文執筆用のテンプレート」「カバー用テンプレート」を参照してください。

<https://www.jafve.org/society/regulations/shippitsuyorvo/>

また執筆及び投稿にあたっては、事前に「初年次教育学会倫理綱領」の確認をお願いします。

[https://www.jafve.org/wp-](https://www.jafve.org/wp-content/uploads/kaisoku190907.pdf)

[content/uploads/kaisoku190907.pdf](https://www.jafve.org/wp-content/uploads/kaisoku190907.pdf)

学会誌の編集規程及び執筆要領に従っていない場合は投稿論文を受領することができません。

(4) 投稿論文の提出先

初年次教育学会ウェブサイト「学会誌」のタグにある「電子投稿システム」からお手続きください。

<https://iap-tp.org/jafve/post/Login>

(5) 投稿資格および1巻あたりの投稿数

本誌に論文を投稿することができる者は、共同執筆者を含め、前年度までに入会し3月末までに会費を納入している個人会員及び機関会員に限られます。また1巻あたりに投稿できる論文の数にも定めがあります。詳細は初年次教育学会誌編集規程をご確認ください。

<http://www.jafve.org/society/regulations/henshukitei/>

会員の皆様からの投稿をお待ちしております。

4. 大会運営委員会からのお知らせ

大会運営委員会委員長 清水 栄子 (愛媛大学)

昨年の初年次教育学会第17回大会は、あいにく台風の影響を受ける中での開催となりましたが、東京家政大学実行委員会の皆さまの臨機応変な対応により、一部ハイブリッド形式も取り入れた大会となりました。大会校である東京家政大学の皆さまのご尽力に加え、シンポジウムや講演でご登壇いただいた皆さま、自由研究発表やラウンドテーブルでご発表いただいた皆さま、ご参加いただいたすべての皆さまのご協力により、充実した大会となりました。改めて、この場をお借りして心より御礼申し上げます。

第18回大会は、2025年9月4日(木)、5日(金)の日程で、「探究から研究へつなげる大学初年次教育」をテーマに、石川県立看護大学(石川県かほく市)を会場として開催いたします。今回もワークショップ、ラウンドテーブル、大会校企画シンポジウムおよび関連イベント、課題研究活動委員会企画シンポジウム、自由研究発表を予定しております。

4月10日(木)頃の大会HP公開を予定しており、それに合わせて自由研究発表およびラウンドテーブルの申込受付を4月10日(木)から5月20日(火)まで行いま

す。なお、既にご案内のとおり、今回の自由研究発表はポスター形式のみとなります。登壇者と参加者の皆さまとの活発な議論が期待される発表形式となりますので、ぜひご応募ください。発表申込の際には、大会要旨集原稿の提出も必要となりますので、早めのご準備をお願いいたします。多くの会員の皆さまからの発表申込とご参加を心よりお待ちしております。

石川県立看護大学による大会校企画シンポジウムでは、「高校で始まった探究学習を大学はどのように捉えたらいいのか」を討論いたします。また、大会校企画イベントとして、「高校生の探究学習報告」と題し、高校生が日ごろの探究活動の成果をポスター発表する機会も予定しております。大会HPが公開されましたら、改めて詳細をご案内いたします。9月に石川県立看護大学で多くの皆さまとお会いできることを楽しみにしております。

本大会が、初年次教育に関する研究や実践の成果発表の場となるとともに、会員相互の交流を深め、知見を共有する機会となるよう、準備を進めてまいります。今後とも、会員の皆さまのご協力を賜りますよう、どうぞよろしくお願いいたします。

5. 第18回大会課題研究の登壇者募集

課題研究活動委員会委員長 山田 礼子 (同志社大学)

本年度の課題研究は、昨年同様に公募型・推薦型の併用により課題研究の登壇者を募集します。課題研究活動委員会で選定した下記の課題について、課題研究委員会からの推薦による登壇者と会員からの自薦での登壇者の公募を行います。多くの会員の応募を期待しています。

課題研究のテーマ：

「初年次教育は生成AIを活かせるか」

(1) 問題の所在と背景

2022年11月30日にオープンAI社から公開されたChatGPTは瞬く間に世の中に広まり、大規模言語モデルの有用性が各所で認識されるようになった。石川県は県庁職員に対して生成AI利用のガイドラインを策定し(2023年6月)、個人情報を入力などを制限することを条件として、職員が業務において積極的に生成AIを使用することを推奨しはじめた。民間でも多くの企業が業務に生成AIを使用させることを推奨し始めている。

生成AIは使用者が適切な指示(=プロンプト)を与えれば、様々なタイプの作文を行うことができる。さらにその作文を、ビジネス用やアカデミズム用の文体に書き直し

たり、子供や幼児向けの文体に書き直したりすることも可能である。情報検索ツールとしても優れており、専門用語の意味を知りたいければインターネット中の膨大な情報からそれを見つけて教えてくれる。さらに解決したい問題を提示すれば、例解を提示することも可能である。具体例として直近の医師国家試験をファイルで生成 AI にアップロードすれば、即座にその解答を提示し、しかも解説までつけてくれる。似たような例題を作るよう指示すれば、それも可能である。それだけでなく、自動翻訳機としても優れており、自分の書いた文章を様々な言語に翻訳可能で、また外国語から日本語への変換もスムーズである。英文解釈の勉強を補うツールとしても優れており、文中で指示代名詞 it が何を受けているのか問えば、明確な解答が返ってくる。また、単に文法の解釈にとどまらず、その英文が書かれた背景を問えば、歴史的・政治的・思想的・文学的背景まで解説が出てくる。

これほどのツールを前にして、大学教育がその影響を受けないわけにはいかないだろう。何より、実業界・産業界・官界がこのツールの使用を推奨していることから、各界への人材供給を期待される大学には、学生に生成 AI を巧みに操る技能を教育することが期待されることも自然である。ところが、ここで大きな問題が懸念される。学術的なアイデアの発表は常に文章表現をともなってきた。あらゆる学問分野が専門雑誌を中核とした「ジャーナル共同体」を形成し、その中で意見交換を通じて発展してきた。もし簡単に文章を生成するツールを大学生に与えてしまうと、逆に彼らから表現者としての主体形成の機会を奪うことになるのではないだろうか。

アカデミック・ライティングの教育の場で生成 AI の使用を許可することは、小学校の算数の勉強の際に児童に計算機を渡すことと対比できる。「1 + 1」を実際に計算することと、計算機上でそれをタイプすることとは、全く意味が異なるのと同じように、自らの思考を表現することと、AI が生成した文章の継ぎ接ぎを作ることとは全く意味が異なる。初年次教育に関わる者は、手放して生成 AI の使用を推奨するのではなく、それを使用することの有用性と弊害を公平に評価して学生に伝えていくことが必要なのではないだろうか。

そこで、本年度の課題研究は生成 AI を活用した初年次教育にスポットを当ててみたい。課題研究活動委員会では、このツールを用いることには、教育効果の向上が期待できる面とそうでない面という二面性があると考え。生成 AI の活用については、近年大学で重要視されてきた「研究、

著作、表現に関連した倫理性」という問題とも深く関わっている。倫理の問題も含め、様々な実践例を紹介しあい、生成 AI の有用性と弊害について議論する場を設けることで、これからの日本の大学における初年次教育の方向性についてともに探っていきたい。

サブテーマ：

- (1) 生成 AI 活用の実践例
- (2) 生成 AI の弊害
- (3) 学力測定と AI 教育
- (4) 倫理性と AI 教育

(2) 選考の方法・スケジュール

この公募選考にあたっては、皆さまの実践や研究成果から、これからの初年次教育や大学教育の在り方を考えつつ、課題発見から課題解決につなげることをめざしています。

課題意識の明確性、実践実績または分析の説得力、発展性、汎用性、などの観点から審査いたします。

別途、課題研究活動委員会・(理事会)からの推薦もありません。

募集人員：3名程度

(i) 書類選考

800～1000字程度に、研究報告の概要についてまとめよう。

①タイトル、②サブテーマのいずれに該当するか(複数可)、③報告内容(内容、方法)、④氏名、所属を記載
送付先：学会事務局 jafye-office@bunken.co.jp

締切：5月7日17時

(ii) 審査委員会で書類選考通過者に面談 (Zoom)：

5月12～16日頃を予定

課題研究委員会で選考結果決定・通知：

5月中旬以降を予定

登壇者の審査・調整を行い、サブテーマ、登壇者確定

(iii) 登壇者打合せ：5月下旬以降を予定

(iv) 公募申請にあたっての留意事項：

- ・初年次教育学会の個人会員もしくは機関会員であること

(3) 審査担当者

課題研究活動委員会：山田 礼子、笹金 光徳、

本田 康二郎

6. 初年次教育実践交流会の報告

地域活動活性化委員会委員長 藤本 元啓 (金沢工業大学)

2024年度中に開催しました初年次教育実践交流会、および交流会として認定している協同教育研究会の概要を報告いたします。

なおこの「地域活動活性化委員会」は、「会員の求めに応じて、地域における初年次教育の普及と情報交換を行い、教育実践の事例を共有する場として実践交流会を企画・運営し、または支援する」もので、開催する実践交流会には本学会の会員以外の方の参加もできますので、お誘い合わせください。

(1) 2024年度第1回初年次教育実践交流会 in 北陸

日時：2024年9月21日（土）13：00～15：40

会場：石川県政記念いのき迎賓館 2F ガーデンルーム

参加者：25名（大学17名〈福岡、大阪、長野、東京、石川〉、高校6名〈校長2名〉、石川県教育委員会1名、石川大学コンソーシアム1名）

テーマ：高大連携で進める「総合的な探究の時間」の成果と課題ー探究的な学習の大学への接続と展開を目指してー

今回は対面式で開催し、2022年度施行の新学習指導要領に基づく高校の「総合的な探究の時間」に焦点を当てました。前半は高校と大学との連携事例の紹介から共通理解を深め、後半は探究的な学習を大学はどのように接続し展開すべきか、つまりこれからの高大接続教育への展望や課題（とくに初年次教育の在り方）を考えるきっかけとしました。

プログラムは以下の通りです。

司会 山本 啓一（北陸大学 経済経営学部）

趣旨説明 垣花 渉（石川県立看護大学 看護学部）

第1部 実践報告

- ①「DX 探究未来塾とおした高大連携」
井上 政人（石川県立羽咋高等学校 校長）
- ②「探究を楽しむための授業デザインの模索」
垣花 渉（石川県立看護大学 看護学部）
- ③「探究的学びの導入部分を支援する高大連携」
馬場 智一（長野県立大学 グローバルマネジメント学部）

第2部 パネルディスカッション

「探究的な学習の高大接続ーとくに初年次教育の観点からー」

コーディネーター：藤本 元啓（金沢工業大学 日本学研究所）

パネリスト：井上 政人、垣花 渉、馬場 智一

まとめ：東 俊之（長野県立大学 グローバルマネジメント学部）

閉式 山本 啓一

〈成果と課題〉

高大連携によって一定の成果は認められるものの、①自己関連性（自分事化）の探究課題（テーマ）設定、②学習の動機づけとしての学びの自分事化、③探究学習と課題解決型学修には共通の問題があり、大学初年次教育では組織体として自分事化した課題解決型教育プログラムの設定など、どこまで「自分事化」できるかが話題となりました。

交流会終了後も個別の意見交換が活発に行われ、予定を大幅に超え17：00過ぎに終会となりました。

(2) 第60回 協同教育研究会（初年次教育実践交流会認定）

日時：2024年9月28日（土）14：00～17：20

会場：久留米大学御井本館3階13BC教室

参加者：研究会38名、情報交換会25名

テーマ：協同探究活動の実際と課題

アクティブラーニングの代表格である問題基盤型学習やプロジェクト型学習は高等教育においても広く活用されています。その有効性を再度議論する必要はないと思います。しかしながら、これらの学習法に期待される成果をいかに実現するか。これは、常に吟味されるべき重要な課題です。参加する学生が嬉々として学び合い、共に変化成長する喜びを共有できる授業づくりはいかにあるべきか。今回の研究会では、協同教育の理論と方法に基づく探究活動を「協同探究活動」と称して、その実際と課題について検討しました。

プログラムは、以下の通りです。

- ①挨拶・導入「挨拶と学びの場づくり、協同探究活動について」安永 悟（久留米大学 文学部）
- ②講演「全学的なPBL教育の展開と到達点および課題」
長濱 文与（三重大学 高等教育デザイン・推進機構）
三重大学では2004年の国立大学法人化以降、PBL（Problem/Project based Learning）教育の導入と展開を核として全学的な教育改善を進めてきました。今回は、本学の教育改革の経緯を紹介し、現在の到達点とそれに至る具体的な方法、そして更なる改革を展望した課題について話題を提供しました。
- ③全体討議「嬉々として学び合える学生の姿をもとめて」
安永 悟（久留米大学 文学部）

学び合えない学生や学び合わない学生など、協同探究活動に乗れない学生や乗ってこない学生、すなわち嬉々として「学び合えない学生」が少なからずいます。彼らの存在は授業の質に大きく影響します。教師として彼らをどのように理解し、どのように対処すればいいのでしょうか。同時に「学び合えない学生」は協同探究活動をどのように捉えているのでしょうか。また、彼らと共に活動することが求められている学生は彼らをどのように理解して、どのような働きかけをしているのでしょうか。授業に積極的に参加し、学び合っている学生の想いにも留意しながら議論を深めました。

(3) 2024年度第2回初年次教育実践交流会 in 北陸

日時：2025年2月8日(土) 13:00~16:45

会場：石川県政記念しいのき迎賓館 2F ガーデンルーム

参加者：54名

高校生：21名(大聖寺高校3チーム, 野々市明倫高校3チーム) *降雪のため, 3校(穴水高校, 鹿西高校, 羽咋高校)の計7チーム(19名)が欠席

高校教員：10名, 大学教員・職員：21名, 大学生：2名

テーマ：高校生の探究学習成果発表(ポスターセッション)とラウンドテーブル

今年度第1回実践交流会に引き続き、高校の「総合的な探究の時間」に焦点を当て、対面式で開催しました。前半は探究学習の成果発表(ポスターセッション)と参加者との質疑応答とコメントシートの作成、後半は探究学習に関する参加チームへの「事前調査シート」にもとづくラウンドテーブル(生徒1テーブル異なる高校2チーム×3テーブル, 参加者1テーブル)というか、テーブル単位での感想や意見の交換をおこないました。自他校の探究学習の振り返りを共有することで、生徒が探究の視野を広げることが目的の一つとしました。次いでテーブルごとにそれらの概要を会場に紹介し、それを受けて高大接続教育、高等教育とくに初年次教育との接続を考えることが当初の予定でした。

プログラムは、以下の通りです。

■11:00~12:00 予行練習(高校生だけの成果発表)

趣旨説明 垣花 渉(石川県立看護大学 看護学部)

第1部 成果発表

大聖寺高校3チーム, 野々市明倫高校3チーム

各チーム3セッション(発表5分, 質疑応答5分)

第2部 ラウンドテーブル

探究的な学習の成果と課題 —高大連携(支援)と高大接続教育(とくに初年次教育)の在り方—

ファシリテーター

垣花 渉(石川県立看護大学 看護学部)

東 俊之(長野県立大学 グローバルマネジメント学部)

關谷 暁子(北陸大学 医療保健学部)

藤本 元啓(金沢工業大学 日本学研究所)

閉式 垣花 渉

全体交流会@自由参加

〈成果と課題〉

自ら参加を希望したチームばかりですから、どの発表もわかりやすい内容でストーリー性があり、大学の教員だけではなく他校生との質疑応答も活発におこなわれました。また評価を記述した付箋紙が、各ポスターの外枠に予想以上に多数貼り付けられ、生徒にとって大いに参考になったようです。

本会終了後のアンケート回答によると、成果発表については、探究活動を人前で発表するのは緊張したが他の学校の発表を見て言葉選びや内容がすごく上手でとても参考になった(生徒)とあり、ラウンドテーブルでは他校の生徒と意見交流できてすごく楽しかった(生徒)、生徒が外部に出て何かを経験する機会は大変貴重(高校教員)、など好評でした。

一方、高校教員から成果発表に関して、参観者が生徒に対して何の目的でどのような質疑応答をする会なのか、大学の研究発表ではないので何でも尋ねてくださいというのは少し違う、など質疑に関するルール・制約の要望意見がありました。

ラウンドテーブルに関しては、生徒の対話の時間をもっと長くすべき、話し合う項目がかなり意図的、誰のためのものかその主体が分からない、などの指摘がありました。当方としては、生徒が「事前調査シート」で回答した項目についての生徒同士の意見交換とそれらの報告を期待したのですが、教員対象の回答項目もあるとの意見がありました。ラウンドテーブルの目的のひとつである「探究学習の現状での成果と課題を共有し、これからの高大連携(支援)と高大接続教育(とくに初年次教育)の在り方について」は、時間の関係から概要説明だけになり、意見交換はできませんでした。またこの部分は、生徒の本音を直接窺い、探究型入試や初年次教育など高大接続改革の参考にしたいと考えていましたが、少々欲張った内容でもあり、教職員だけの別プログラムを設定すべきであったのかもかもしれません。

高校側にとっては、自校内とは異なる環境下における成果発表とそれに関する生徒同士の交流など、あくまでも生徒が主体の発表会であることが重要とのことです。高校側のニーズと当方の目的の一部とに齟齬が生じましたが、次の機会があれば企画・運営に生かしたいと考えています。

(4) 第 61 回 協同教育研究会（初年次教育実践交流会認定）

日 時：2025 年 3 月 1 日（土） 13：30～17：10

会 場：久留米大学御井本館 3 階 13BC 教室

参加者：研究会 58 名、情報交換会 28 名

テーマ：「学び合い苦手学生」

本研究会では、いわゆる「学び合い苦手学生」の視点から協同による教育指導のあり方について数年前より検討してきました。とくに協同的な学びに強い拒否感を示す学生の存在をクローズアップし、その拒否感の実体や形成過程、さらには克服過程を検討してきました。そのなかで「哲学対話」に出会いました。この「哲学対話」の観点から仲間との学び合いを問い直すことで、これまで学び合えなかった学生が苦手意識や拒否感を手放し、仲間と学び合えるようになるヒントが潜んでいるという期待をもっています。その可能性を参加者と共有することを今回の目的としました。

プログラムは、以下の通りです。

①挨拶・導入 安永 悟（久留米大学 文学部）

②ワークショップ「哲学対話」

馬場 智一（長野県立大学 グローバルマネジメント学部）

哲学対話は、普段改めて考えない当たり前のことについて、問いを立て、複数人数で話し合い、問いへの答えや新たな問いを発見する活動です。

このワークショップでは、まず哲学対話の歴史、実践形態、理論について解説しました。哲学対話では身体的・心理的・知的安全性を確保することが重要です。関心のある人が集まる哲学カフェと違い、学校・授業での哲学カフェはしばしば動機づけや心理的・知的安全性を確保することが、学校という制度の性質上困難なことがあります。哲学対話を成立させるためには、普段の授業や学校生活の中で、経験や感情の言語化とそれを互いに聞き合うこと、言葉や論理に関わる簡単なゲームを行い、「日常の動線に対話的な活動を埋め込む」ことが大切です。

解説に続いて簡単なゲームを何種類か実践しました。グループごとに問いを出し、哲学対話に向いている問いを選び、一定のルールやコツに基づき哲学対話をグループごと

に行いました。最後に、ワークと対話を振り返り、今回体験したことを、自分の現場でどう活かせるか話し合いました。

7. 「2024 年度教育実践賞」審査結果報告

教育実践賞委員会委員長 山本 啓一（北陸大学）

「2024 年度教育実践賞」につきまして、会員投票と審査委員会での審査が終了し、理事会において承認をいただきましたので、結果のご報告をいたします。

2024 年度の教育実践賞には 9 つの応募があり、1 次審査通過後の、審査委員会が厳正な審査を行った結果、以下の 4 つの取組が 2 次審査を通過しました。なお、審査委員会では「どの取組もよかった」との評価があり、特に新しい可能性やブレイクスルーを示す取り組みを高く評価しました。

No	申請者	所属大学	取組み名称
1	丸山 実子	島根大学	初年次教育における準正課科目をプロジェクト化した取組み～地域人材育成コース生専用プロジェクト＝コープロより～
2	山中 隆史 他 4 名	香川大学	入学当初の演習クラスでの心理的安全性の高いクラス運営と他教員への展開—創造工学部 1 年次必修のロジカル思考演習—
3	佐渡 島紗織 他 5 名	早稲田大学	個別指導をする学部横断型アカデミック・ライティング授業—「学術的文章の作成」—
4	坂井 美穂 他 3 名	日本文理大学	初年次工学部における日本語ライティング教育の実践

ポスターセッションでの会員の投票結果も参考にしうえて、審査委員会での検討の結果、次のように表彰することといたします。

最優秀賞	丸山実子 島根大学
優秀賞	山中隆史 他 4 名 香川大学
優秀賞	佐渡島紗織 他 5 名 早稲田大学
優秀賞	坂井美穂 他 3 名 日本文理大学

受賞されたみなさま、おめでとうございます。次回大会での表彰式、及び、学会誌での審査報告に先立ち、受賞さ

れた取組について、審査委員のコメントを踏まえ、簡単に講評を述べさせていただきます。

機関名	講評
島根大学	本取組は初年次教育における正課教育と準正課教育の連結というアプローチにより、地域と連携した実践的教育を実現している点に高い独創性が認められます。入試（地域志向型入試）と結びついた教育プログラムとして高大接続の新しい方向性を示し、専任教員と地域コーディネーターの協働により、産業界と連携した教育体制を構築しています。受入先からの高い満足度や地元からの注目度に加え、学生の地元就職率の高さなど具体的成果が見られる点等、「インパクトもある」取り組みとして、「速いスピードで成長している」点が高く評価されました。地方大学の使命を具現化した模範的事例と言えます。
香川大学	本取組は工学系の学生特有の消極性を克服するため、心理的安全性を高める授業設計を工夫している点が独創的です。「先生たちの協働体制」に関して、教員間の心理的安全性を高めるチーム作りから取り組み、教育の質を均一化している点が優れています。発言カウントシステムの開発など、授業改善のための具体的ツールの開発も行われています。授業の満足度評価が高く、心理的安全性と批判的思考態度の両方を向上させる成果が得られている点が評価されました。
早稲田大学	本取組は16年間の長期にわたり継続・発展させてきた実績があります。大学院生を指導者として養成する仕組みにより、持続可能な大規模運営体制を確立し、教員、シニア指導員、文章指導者の重層的な組織で質の高い個別指導を実現しています。学部横断型で全学的な文章作成能力の向上に貢献し、履修者による高い評価（役立ち度95%、上達実感89%）を得ている点が評価されました。オンデマンド授業と個別指導を組み合わせた効果的な教育方法の確立は大いに参考になります。

日本文理大学	本取組はスモールステップ・ユニット学習（SSU 学習）の導入により、学生の主体的な学びを促進している点が特徴的です。学生モニター制を取り入れ、学生視点を授業改善に活かす工夫や、ICT ツールを効果的に活用した自律的学習支援が行われています。教員のチームティーチングにより学科を超えた教育の質向上を図り、授業前後で学生の文章作成能力に具体的な向上が見られる点が評価されました。約1割の学生が自律的な学びから脱落する課題に対して、様々な工夫をしている点も興味深いものでした。
--------	---

また、今回の審査委員会では会員による投票のあり方についても議論があり、次回からは大会でのポスター発表などの場で即日開票を行うことも検討されています。

以上、審査結果の報告です。引き続き会員のみなさまには、ご支援・ご協力を賜りたく、お願い申し上げます。

8. 機関会員アンケート結果の報告

将来構想委員会委員長 川嶋 太津夫（大阪大学）

2024年4月に本学会機関会員アンケートを実施しました。新学期のご多忙の中、ご協力いただきありがとうございます。

本アンケートは、初年次教育は、各大学での組織的取組みが重要であることから、機関として本学会に加入していただいている各大学の初年次教育の現状と課題、そして本学会への要望等を確認し、今後本学会と機関会員校とのエンゲージメントをさらに高めることを目的として実施しました。

アンケート実施時、機関会員は81校でしたが、回答をいただいたのは15機関（18.5%）に留まりました。やはり、新学期早々の実施が影響したのではと反省しています。

さて、以下に結果の概要をお知らせします。

- 1) 大会への参加者が0名という大学が過半数を超えている一方、1, 2名は参加している大学も増加しており、4, 5名が参加しているという大学も見られる。
- 2) 実践報告を行った機関はあるものの、ほとんどの機関会員は研究報告、実践報告および学会誌投稿を行っていない。
- 3) 大会以外の会合への参加も少数にとどまる。
- 4) 初年次教育の実施状況は機関の規模、特性などで多様

である。

- 5) 「教育内容の調整」(73.3%)、「2年次以降の教育への接続」(60.0%)、および「担当教員の確保」(33.3%)が多く多くの大学で共通する初年次教育の課題となっている。
- 6) 「好事例(グッド・プラクティス)の紹介」(86.7%)、「初年次教育をテーマとしたFDへの講師の派遣」(66.7%)、および「貴学における初年次教育の成果の検証」(40.0%)が学会に対する主な期待となっている。
- 7) 現状の会費については妥当という回答が過半数となっている。

機関会員は、毎年度の大会や紀要への寄稿は5名まで可能ですが、多くの会員校からの実際の参加や寄稿はそれを大きく下回っています。その背景には学会からの周知が十分ではないことも考えられます。また、学会への要望も何点かいただいています。

今回のアンケートの結果については、関係する委員会、理事会等での検討を経て、総会等とで対応策を提案させていただきます。

最後になりますが、今後も本学会へのご要望やご意見があれば随時、ご連絡いただければ幸いです。

9. 編集担当より

総務広報委員会委員長 杉谷 祐美子(青山学院大学)

(1) 賛助会員による広告添付について

賛助会員には、年1回、会員への情報提供の際に、A4で1ページ分の広告・情報提供資料の添付が認められています。本学会ニュースレターでは第4号より、それまでのメール添付ではなく、学会ウェブに広告データを次号刊行まで掲載します。

なお、学会および学会事務局は、これらの広告内容に関与していません。

<https://www.jafve.org/newsletter/newsletter17/>

(2) 実践事例の募集について

ニュースレターに掲載すべき実践事例や事例紹介などを募集しております。掲載ご希望の方は学会事務局にお知らせください。

(3) 事務局分室について

本学会では国際文献社に事務局業務の委託を行っております。問い合わせ等につきましては右記をご確認ください。

事務局分室

〒162-0801

東京都新宿区山吹町358-5 アカデミーセンター

TEL: 03(6824)9372 FAX: 03(5227)8631

E-mail: jafve-office@bunken.co.jp

事務局 関西大学 山田 剛史研究室内

編集: 杉谷 祐美子, 大嶋 康裕(総務広報委員会)

(2025年3月31日第1版公表)